

刊行にあたって

歯周病に対する研究の進歩はとどまるところを知りません。90年代後半から21世紀にかけて、歯周病とさまざまな全身疾患の関係が明らかになってきました。本書でも語られているように、心疾患、糖尿病、低体重児出産など、歯周病と全身疾患との関係は多岐にわたり、それらはペリオドンタル・メディスンとも呼ばれ、“Floss or Die!?”（フロスカ死か!?!）といった言葉がメディアの見出しを飾り、歯科界、医学界、また一般の方々の注意を引いてきました。

さらに、両者のリンクの根底には「炎症」があり、歯周病の病因が解明されるにつれ、歯周病の世界では炎症を見つめ直そうという考えが広まってきました^{1,2)}。従来の「歯周ポケットは悪」から、「炎症」が歯周組織を破壊し、また全身にも影響を及ぼす本質であること、そして歯周治療のゴールはポケットをなくすことではなく、炎症の臨床的指標である BOP（Bleeding on probing: プローブ時出血）をなくすことであると、考え方が変わってきました。

2013年にヨーロッパ歯周病学会（EFP）とアメリカ歯周病学会（AAP）は「歯周病と全身疾患」に関するワークショップを開催し、その時点で得られたエビデンスをまとめ、その結果は“Journal of Periodontology”の増刊号として刊行されました。本書はそれを下敷きとし、その後に得られた新しいエビデンスを加え、また豊富なイラストとともに読者にとってわかりやすい内容にまとめられています。本会が編纂する書籍として昨年上梓された『歯周組織再生療法のコンセンサス』（医歯薬出版）に続く、エビデンスシリーズの第2弾として企画されました。本書の編集には、プロジェクト・リーダーである築山鉄平先生の強いリーダーシップのもと、多くの会員がプロジェクトに参加してくれました。彼らの努力なくして、本書が日の目を見ることはなかったでしょう。編集に携わったすべての方々に、厚くお礼を申し上げます。

「臨床」という本会の名称が示すように、本会ではいままでこの分野への取り組みは必ずしも十分ではありませんでした。しかし、いまや歯周病と全身疾患とのリンクは患者さんも関心をもつ事項となり、臨床に携わる会員の必修事項です。本書が、この分野のスタンダードとして、多くの歯科医師、歯科衛生士に長く読み継がれることを理事長として願っています。

- 1) Offenbacher S, Barros SP, Beck JD: Rethinking periodontal inflammation. J Periodontol, 79 (8 Suppl) : 1577-84, 2008.
- 2) McGuire MK: Should our focus on inflammation change the way we practice? J Periodontol, 79 (11) : 2016-20, 2008.

2017年3月

特定非営利活動法人 日本臨床歯周病学会 理事長 二階堂雅彦